

120年続くなし産地に新風を吹き込む 新規担い手確保と産地維持の取り組み

富山県富山農林振興センター 担い手支援課 副主幹普及指導員 **濱谷聡志**

JAなのはな（富山市）とJAいみず野（射水市）の管内にまたがる「呉羽梨」産地では、産地外から新規就農希望者を広く受け入れ、第三者継承によって担い手確保を図っている。今号では、「呉羽梨」産地における担い手対策の構築に向け、JAなどと連携した富山農林振興センターの取り組みを紹介する。

背景

「呉羽梨」産地は、約120年の歴史を誇るブランドなし産地である。しかし、近年は高齢化にともない生産農家、栽培面積ともに減少（平成14年：359戸・182ha→平成29年：285戸・137ha）していた。また、平成29年の意向調査などの結果からさらなる栽培面積の減少が予測され、産地の衰退が危惧された。このため、当センターでは、生産者とJA、市などと連携し、産地外からも新規就農希望者を広く受け入れ、第三者継承によって産地を維持・発展できる仕組みの構築をめざした。

活動内容

新規担い手育成・確保に向けた推進体制の整備

呉羽地区果樹組合連合会（生産者団体）とJA、市、農林振興センターで構成する「呉羽梨産地活性化推進委員会」を担い手育成対策の推進母体とし、各組織の役割分担を明確にするとともに情報共有を図った（表1）。

産地内の意識改革と対策の見える化

産地外からの新規就農希望者受け入れに慎重な生産者の意識改革を図るため、「経営継承啓発セミナー」を開催した。また、担い手対策の見える化を図るため、対策の内容や次年度目標などを記した「呉羽梨産地活性化基本

表1 呉羽梨産地活性化推進委員会の構成と役割分担

推進委員会	構成組織	役割
呉羽梨産地活性化推進委員会	呉羽地区果樹組合連合会（生産者）	継承園地などの斡旋、栽培技術指導など
	JAなのはな、JAいみず野	組織運営支援、各種補助事業活用支援、機械・資材などの調達、融資相談対応など
	富山市・射水市	就農相談、各種補助事業の活用支援など
	広域普及指導センター	活動への助言、栽培技術指導など
	富山・高岡農林振興センター	活動のコーディネート、栽培技術指導、就農相談、各種補助事業の活用支援など

方針」を毎年作成して全戸に配付するとともに、産地外から就農希望のあったA氏（写真1）をモデルケースとして伴走支援した。

新規担い手受け入れ体制の整備

産地外からの新規就農希望者が、就農後すぐに収穫できる成木園を継承できるよう、毎年、全生産者を対象に栽培意向調査を実施し、伐採予定の園地情報を収集して継承可能な園地リストを作成した。

新規就農希望者の募集と就農支援体制の構築

産地外からの就農希望者の募集は、産地の紹介・就農までの流れ・支援体制などを記載した「産地提案書」（図1）を作成し、富山県農林水産公社が運営する就農支援



写真1 平成29年に就農したモデルケースA氏（当時26歳）

富山県内最大規模の日本なし産地 「呉羽梨」の栽培を始めませんか？

【呉羽梨産地の紹介】

富山市南西部の呉羽地区と、射水市東北部（旧小杉町、大門町）の射水地区にまたがっており、富山市中心市街地から産地まで車で20分程度の都市近郊型の日本なし広域生産園地で、呉羽丘陵の畑地帯から水田地帯に広がっています。

【産地の歴史】

当地区での梨栽培の歴史は長く、明治30年代に「長十郎」を試作したのがきっかけとなり、昭和37年から共同選果が、昭和46年から県外市場への出荷も行われ、平成24年から光センサーによる新たな選果ラインも導入され、現在2,000トン程度が県内外の市場に出回されています。

【産地規模】

栽培面積：135ha 栽培農家：275戸（H30実績）

【栽培品種】

栽培品種は、8月上中旬頃から収穫できる、贈答需要が高い「幸水」が7割を占め、「豊水」、「あきつぎ」、「新高」、「新興」など順次収穫、販売しています。

【求める人材】

- ① 梨栽培を将来にわたって継続的・意欲的に取り組むことができる方
- ② 呉羽梨の組合活動や地域活動に積極的に参加できる方
- ③ 農業や梨栽培が未経験者の場合、とやま農業未来カレッジ等で基礎的な研修を受けることが可能な方



図1 産地提案書（一部抜粋）

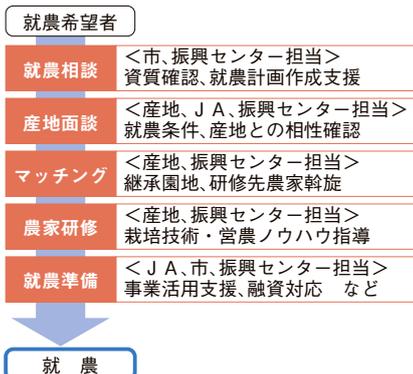


図2 関係機関の連携による就農支援体制



写真2 若手生産者組織「梨クラブ」

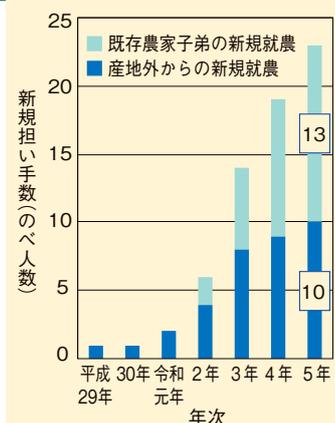


図3 新規担い手確保実績

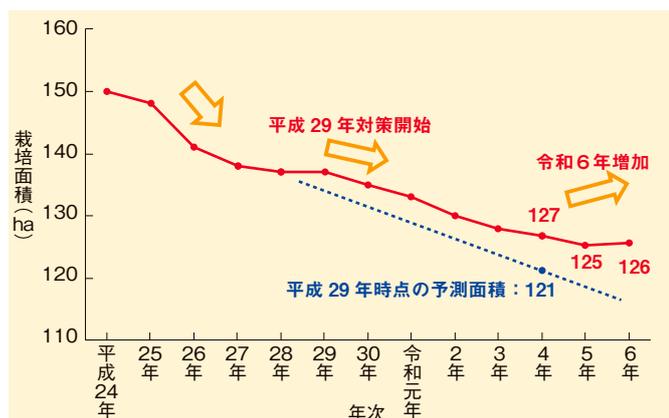


図4 栽培面積の推移

サイト「とやま就農ナビ」へ掲載するとともに、同会社が運営する農業の担い手育成機関「とやま農業未来カレッジ」の研修生にも情報提供を行った。

また、就農希望者が円滑に就農できるよう、J Aや産地、市などと連携した支援体制（図2）を構築した。

新規担い手の定着支援

新規担い手は、産地の若手生産者組織「梨クラブ」（構成員18名、J Aと農林振興センターが運営支援：写真2）への加入に誘導し、基礎講座や各種講習会、実践研修、県外先進事例研修などに参加してもらうことで技術習得を支援した。また、産地外からの新規就農者と産地内若手生産者が一緒に活動することで互いに仲間意識が芽生え、産地内に円滑に受け入れられるきっかけとなった。

就農後の経営安定化支援

新規担い手の経営安定を図るため、就農後も継承園地のマッチングによる成木園の規模拡大や、果樹棚だけが残っている遊休農地も斡旋し、補助事業を活用して新規植栽（園地再生）を支援した。

成果

産地内外から新規担い手が増加・定着

平成29年以降、モデルケースとして育成したA氏を含



図5 「呉羽梨」産地の取り組みをモデルとした県全体の果樹産地の第三者継承支援(園地マッチング)

め、産地外から10名が新規就農し、またこの取り組みが既存農家子弟の継承に対する意欲にも結びつき、家族継承による新規就農も13名あり、計23名の新規担い手を育成・確保できた（図3）。

栽培面積減少の歯止め

新規担い手へ4.3haの園地が継承され、さらに新植により1.2haの遊休園地が再生された。この結果、取り組み開始年の平成29年に予測された栽培面積の減少に一定の歯止めをかけることができ、さらには、令和6年度には初めて栽培面積が増加に転じた（図4）。

県内果樹産地における担い手確保対策への波及

「呉羽梨」産地の担い手確保対策がモデルケースとなり、令和5年度から県全体を対象とした取り組み（図5）が始まった。この取り組みにより、県内の他産地でも担い手不足の問題が解消され、活性化につながる事が期待される。

今後の展開方向

新規担い手が継承する園地のなかには、老木化や不適切な管理により生産性が低下したものが多い。生産性の改善には、樹の状態に応じたせん定や肥培管理が必要だが、経験の浅い新規就農者には高いハードルとなっている。

このため、他県で事例のあるトレーニングファーム方式の導入などを検討し、産地外からの就農希望者がより円滑に参入できる環境を整えることで、「呉羽梨」産地のいっそうの発展につなげていきたい。